

〔類聚名物考 調度十〕泔杯

今女の用る鬢水入の事なり、小茶碗の如くして蓋有りて、中央の棹子の如き臺有り、  
 〔貞丈雜記調度〕一ゆするつきは、泔杯カシゴと書く、びん水入の事也、その形は茶碗の如し、木にて作り、漆  
 にてぬり、蒔繪したるもあり、又銀にて作り、げぼりをえたるもあり、ふたも茶碗のふたの如し、臺  
 もゆするつきと對にする、形は茶碗の臺の如し、但臺の中ゆするつきの絲をうくる所のあ  
 なは、あけ通さずして、そこあり、又下臺別にあり、是は香臺にも用べき様の形也、上は窠形クサガタにて、ふ  
 ち二分計も高し、足五所にあり、金物あり、五所にあげまきを結び垂る也、足の下は輪也、是も窠也、  
 ゆするつきの圖ゆするつきの圖みてよむべき、五字共にす

頭書

本名泔杯ノ臺ト云也、面七寸三分ト元服記ニアリ、

泔杯の臺にあげ巻を付る事、本式いかな物を打て、それにあげまきを付るにはあらず、臺の上  
 を錦にて張りて、其端々を組緒にて臺の板にとち付て、その緒の餘りを足の方へ引出して、あ  
 げ巻に結ぶ也、織物を板にとち付るに、大針と小針とまぜてとぢる也、大針にながくとぢたる  
 をになと云、小針に短くとぢたるを蛇と云、河貝結、あはび結の事、包結記にくわしく記す、

一ゆするつきと云事、ゆするはゆりする也、泔杯と書てゆするつきと云も、泔はえろみづとよむ  
 字也、坏ツキはすべて碗の類を云、さかづきと云も、酒坏と云意也、たかつきと云も、高坏也、扱泔は、米を  
 水に入れてぬかをゆり、米と米をすり合てとぐ故、ゆりすると云事を略して、ゆすると云也、米をと  
 ぎたる、一番の白水をびん水に用る也、此白水を入る坏なる故、ゆするつきと云也、白水は性の寒  
 る物也、人の血氣はのぼする物也、のぼせ強ければ眼わろくなり、或は頭痛し、又は髪の内ウチに瘡を  
 生ずる事ある故、頭をばひやすをよしとす、依之髪を結ふに、白水を櫛ヘシに付て、髪をけづる也、けづる